
ブースト・ブレード

九条蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブースト・ブレード

【Nコード】

N9560Z

【作者名】

九条蓮

【あらすじ】

機械類が発達した村・機重村で過ごすゲーマー高校生・佐藤セナ。彼はある日、自らが通う学校で配られたゲームディスクを起動した。それが、生徒全員を巻き込んだ、ログアウト不可能な世界への入り口とも知らずに……。

第一話：起動

今現在、俺はどこにいるのだろう？

そう思い、一度目を閉じる。

そして、すぐ開ける。

でも、何も変わっていない。

目の前には唯一の親友だけ、それ以外は、

真っ暗な闇で覆われていた。

どうしてこうなった？

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ。

数時間前

俺、佐藤セナさとうは、早朝に家を出た。

理由は、日直だから。

俺の住んでいる機重村きぢゅうそんは、ある技術が発達している。

それは機械。

クーラーや、携帯電話・冷蔵庫・ストーブなどの、電化製品は当然。

車や、バイクなどの自動車。

すべてが最先端の機械ばかり。

そして、中でも一番すごいのは、パソコンとハードディスク。

ここは人口がとっても少ないのでパソコンによるカリキュラムを受けている。

まあ、出費を少なくするために二人で一台を使っているのだが。

さて、日直だから早く学校に行かなければいけないのは、パソコンを、クラスの人数の半数持っていかなければいけないのだ。

「失礼しま〜」

「今日は遅かったね〜。セナ君」

俺の声を遮ったのは、俺のクラスの担任である、
？咲モミジ。彼女はプログラミングの天才である。

「はい、これ、二十個あるから重いよ〜」

脳天気言いながら、パソコンの入った籠を出してくる。

「なら、手伝ってくれよ」

「いや」

即答だった。皮肉気味に言ったのに、一言で断わりやがった。

「あれ？ディスクはどうした？」

籠を受け取ると、いつもなら一緒に入ってるディスクがない事に

気付いた。

「ああ、それなら〜、あとで私が持って行くから〜」

「ふ〜ん……。了解」

「じゃ、また後で〜」

そう言っモミジと別れ、教室へ。

この学校は、数少ない人口の子共が通っているため、
学年など関係なしになっている。

生徒の総数は約、百二十人。

全学年あわせて百二十人ぐらいなのだ。

俺は教室のドアを開けて中を見ると先客がいた。

「よ、セナ。日直乙」

「そう思うなら手伝ってくれ。マコ」

彼は鈴木マコト。オタクである。

ちなみに、俺はゲーマーである。

「手伝ってもいいけどよ〜。条件がある」

「なんだ？」

こいつが条件と言うと簡単なものか、無茶なもの二つに分かれ

る。

「こないださ、新しいゲームを見たんだけど……」

「どんな感じのストリで、なんて題名だ？」

マコトの家はゲーム会社見たいなもので、

マコトは新作のゲームがどんなのか見れるのだ。羨ましい。

「題名はB、Bって書いてあった。ストーリーは……覚えてないや」

B、B……か。どんなだろう。

「んで、それがどうした？」

「ん、出たらさ、一緒に攻略してくれ」

「分かった。出たらお前と最初に攻略しよう」

俺はゲーマーな為、新作ゲーム等の攻略を手伝ってほしいとよく依頼されるのだ。

「んじゃあ、交渉成立つと」

「俺は左の方を準備するから、セナは右を」

「オッケー」

短い返事をして、準備に取り掛かった。

二人でやったおかげで、十分で終了した。

「ありがとう。助かった」

「どういたしまして」

礼を言ったらドアが開いた。

「おっはよ」

「……………」

入ってきたのは二人。

どちらも同年代の知り合い。

「今日はセナ君が日直だったんだね」

「マコが手伝ってくれたんだよ」

「へへ。マコ君偉いね」

活発というか、元気というか、とにかく明るいこの子は、

ついでに

東條アキ。マコトの思い人である。

「おはよう、ユナ」

「……………おはよう」

この、無口な子は柊ユナ。

俺の思い人である。

アキは明るく元気で、優しいので、ファンクラブもある。

また、ユナも無口だが可愛くて、背も低いので、ファンクラブがある。

「……………でさー」

「へー、そうなんだ。知らなかった」

すぐそこでマコとアキが会話していた。

いいなー。羨ましい。俺もユナと話したい。

「……………なあ、セナ」

「ん、な、なんだ」

いきなりでびっくりしたー。

でも、ユナから話しかけられるって初めてだな。

「……………セナがマコトの事が好きって……………」

「それはデマだ」

ユナが言い終わる前に断言した。

なんか、あれだ。

俺とマコが仲が良いってだけでそんな噂を誰かが立てやがった。

「……………そう、なのか？」

「ああ、そうだ」

「……………そうか、良かった」

最後の方は聞き取れなかったが、何故か安心したようだ。

しばらくユナと話していると、他の生徒の声が聞こえてきたので、

撤退。

俺達がこの二人と話しているのを知られたら、クラスの全員に殺される。

その後はマコと他愛もない話をした。
言っていなかったけど、俺とマコは席が隣だ。

チャイムが鳴り響き、暫くしてモミジが教室に来た。
「全員席についてる？ 今からディスク配るから」
そう言っでディスクを配っていくモミジ。

「先生、これって何のディスクですか？」

「これ？ なんか B、B って言ってたけど」

B、B どこかで聞いた名前だな。

「おい。おい、セナ」

「ん？ なんだ？」

小声でマコが話しかけてくる。

「B、B って、ほら、朝話しただろ」

「ああ、そう言えばそうだな」

なんか新しいゲームのソフトで、マコと一緒に攻略するって約束した……。

「って、それって！」

「ああ、アレが本当に B、B なら」

「これは、ゲームソフトって事か」

「そう言う事だ」

でもおかしいな、学校でゲームなんて、
校長はともかく、あの鬼理事長が許すわけがない。

「みんな、ディスクセツトした？」

「やべ。早くセツトしようぜ」

「ああ、分かった」

俺よりマコが作業した方が早いので、マコに任せる。

「よし、後は起動ボタンを押すだけだ」

マコの作業が終わってすぐに

「それじゃ、起動ボタン押して」

その声と同時に俺たちは起動ボタンを押した。

カチッ

そして、押した瞬間、目の前が真っ暗になった。

第二話：案内人

そうだ、アレを起動させたから、俺はここにいるのか。

「セナ、無事か!？」

「ああ、マコ、お前もいたのか」

まあ、無事でよかった。

「ここはどこだ？」

「多分だが、ゲームの中だ」

その一言でマコは黙った。

そして、

「それって天国じゃん!!」
パラダイス

そう言っただけで喜び始めた。

「は?どうして?」

「だってさ、考えてみる!俺達は今、どこにいる?どこにいる?」

ゲームの中だとは思っけど……。って、

「完全^{フル}ダイブ……」

「その通り!」

完全ダイブとは、プレイヤーの意識は当然、

五感もゲーム世界に共通させる新システム……のはず。

「でも、それってあと三年はかかるって……」

マコは少し考えて、

「……理事長」

と、呟いた。

「あの鬼が?ないない」

鬼もとい理事長は簡単に言えば、真面目でゲーム嫌いのロリコン。前にそう言ったら、思いつきりぶん殴られた。

「いや、あんまり否定は出来ないぞ」

「どうしてだ?情報屋さん」

マコは小学五年生から、情報屋なるものをやっている。
依頼もされるそうだが、ほぼ一日で終わらせるスピード解決。そ
れが売りらしい。

「いや、俺も聞いたただけなんだがな」

「うんうん」

「実はあの理事長ゲームの」

「あの！すみません！」

マコの話は最後まで続かなかった。

理由は今俺達に話しかけた少女のせいだ。

「え」と……。君は？」

話の最中に声をかけられ、マコはちよつと不機嫌気味。

「はい！案内役のリリイと言います」

「案内役？」

「ブースト・ブレードの世界への案内役です」

案内役のこの子、信用……できるのか？

マコにアイサインを送ると、“大丈夫”と帰ってきた。

「ふむ、ではお願いする」

「分かりました！」

すると、少女は少し考えて、

「名前を書いてください」

紙とペンを出してきた。

「名前は偽名でも構いません。あと、書くのは名前だけでいい
す」

俺は普通にセナと書き、渡す。

マコトの見たら、普通にマコトと書かれていた。

「では次に進みます。ついて来て下さい」

俺は彼女について行きながら、

「なあ、マコ」

「なんだ？」

「どうして名前を普通にしたんだ？」

当然の質問をした。

マコはオタクなのに何故、厨二病全開の名前にしなかったのか不思議である。

「あれは、俺じゃないからいいの。でも、今回は違っただろ」

まあ、やるのは実際の俺達だからなあ。

「着きました。道具の間です」

話している最中に目的地に着いたらしい。

入ってまず目についたのは、十種類の武器。

「まず、この中からメインとなる武器を一つ選んでください」

左から順に、

・片手剣・太刀・両手剣・双剣・鎌サイス・弓矢・棍棒メイス・長銃ライフル・双銃・杖ロッドだ。

「マコ、お前は何にする？」

「うーん」

一通り武器を見て、悩んだ末に、

「うん、両手剣だな」

両手剣にしたらしい。

じゃあ俺は何にするかな。

そう悩んでいると

「セナに両手剣譲ろうか？」

と、言われたので、

「いや、問題ない」

と即答した。

「俺は今、双剣にするか、鎌にするかで悩んでいるんだ」

双剣は動きとか速そうだけど、鎌は形状からしてカッコいいしな

あ。

「うーん……。よし、決めた」

「どっちにするんだ？」

「双剣にする」

結局、後々の事を考えて、双剣にした。

メイン武器を選び終わるとリリイが

「メインが決まったようなので、次はサブ武器を一つ、選んでください」

なんて言った。

するとマコが、

「じゃあ、こんどはセナから決めろよ。まあ、鎌だと思うけど」
最初に選ばせてくれた。

「ありがとさん。じゃあ……、長銃で」

「は？」

俺が決めるとマコは変な声を出した。

「どうした？マコ」

「どうしたじゃねーよ。今の流れだったら普通、鎌を選ぶだろ常考」

ああ、そうゆう事か。

さつき双剣か鎌で悩んでいたのに、なぜ長銃かって事か。

「いや、メインで近距離なら、サブは遠距離だろ」

遠近どっちにも対応できなきゃ、ゲーマー失格だしね。

「はあ。そうだったな、セナはゲーマーだったな。忘れてた」
忘れてられたらしい。俺の一番の特徴が。

「で、マコは何にするんだ？」

「俺？俺は……どうすっかなあ」

個人的には弓矢がおススメだけど、そんな事は一切口にしない。
武器は自分が扱いたい物が一番なのだから。

「決めた。双銃にする」

マコはサブの武器を双銃に決めたそうだ。

「メイン・サブの武器が決まりましたので、次に移ります」

その後、俺達は好きな色や、嫌いな色、趣味や特技などを聞かれ

た。

「はい。大体は終了です。後は質問とかありますか？」

色々と聞かれ、質問タイムに。

「一つ聞きたい事がある」

最初に質問したのはマコである。

「ブースト・ブレードってどんな世界なんだ？」

まあ、当然の質問を言った。

「それは向こうで御主人様が言われます」

即答だった。まるで、こう聞かれたらこう言えって言われてみただい。

「俺からも一つある」

「何でしょうか」

「メインメニューはどうやって出すんだ？」

ゲーマーとして、これは聞かなければいけない質問。

これを知らないと初期装備でラスボスを倒す様なものだ。

「確か、念じれば出るはずですよ……多分」

多分って、案内役しつかりしろよ。

ひとまず、言われた通り念じてみた。

すると、目の前にモニターが現れた。

色んな操作をして使い方は大体覚えたので、モニターを消す。

の、だが。俺は嫌な予感がし、再度、モニターを出した。

「どうしたんだセナ。そんなに焦った顔をして」

マコが何か言ったが耳に入ってこない。

それよりも、俺はメニューを睨むように隅々まで見ていた。

「やっぱり……」

「ん？何がだ？」

俺の嫌な予感が当たってしまった。

最悪である。これは、最悪すぎる。

「おい……リリイ」

「はい。なんですか？」

「もう一つ、質問がある」

マコがこれ以上なんかあるのか？

そんな事を目で訴えてきたが、気にしない

「ログアウトのボタンはどこだ」

その一言で誰も喋らなくなった。

そう、メニューをどれだけみても、ログアウトのボタンがなかったのである。

「答える。リリイ」

彼女はため息をつき

「ログアウトのボタンはありません。なぜなら」

俺の思っていた事を言う。

「この世界はログアウト不可能です」

第三話：管理人

やはり、俺の予想は当たっていた。

マコはそんな事考えていなかったらしく驚いている。

「どう……すれば、戻れるんだ？」

やっと言った言葉、それはあつさりかわされた。

「それも、御主人様が言います」

「なんだよ……それ」

「？どうかしましたか？」

マコが何を呟いたのかリリイには聞こえなかったらしい。

その行動が、怒りを買うものとは知らずに。

「なんだよそれ！」

そう言つてリリイに掴み掛かろうとするが、すり抜けた。

「言いませんでしたが、私には触れられません」

「マコ、お前の気持ちは分かる。だから落ち着け」

暫く宥めっているとマコが落ち着きを取り戻してきた。

「悪い。つい熱くなった」

「安心しろ。気にしてない」

俺は前にマコに助けてもらった。

情報屋のマコに……。

だから、こんな事は気にしない。

もつとも、本人に言ったら殺されかけないので言わないが。

「どうやら、準備が出来たようです。

セナ様、マコト様、後はここから少し歩けば」

「ブースト・ブレードの世界、か？」

「はい。その通りです」

リリイが言い終わる前に俺が言ってやった。

さっきのマコに対する、小さな仕返し。

「それでは、私は消えます。さようなら」

そう言って、彼女は霧の様に消えて言った。

「そんじゃ、進むか」

そう言って、俺達は向かう。

ブースト・ブレードの世界へ。

しばらく歩くと、一筋の光が見えた。

俺達はその光に向かって歩く。

そして

大きな広場に出た。

いや、沢山の人がいる広場に出た。

「ここが……」

「ああ、ブースト・ブレードの世界だろ」

広場にいる奴らは全員何か不満を言っていたが俺には関係ない。

彼女は、どこに居るんだろうか。

俺は朝、話していた彼女の事を考えていた。

「あれ？セナ君とマコト君じゃん」

不意に、後ろから声をかけられた。

でも、警戒はしない。

聞きなれた声だから。

「ようアキ」

俺より先にマコトが反応した。

まあ、当然か。

「……………」

アキの斜め後ろで、ユナが此方を見ている。

「よ、ユナ」

俺はユナを見てある事に気がついた。

服装が変わっている。制服から、あれは……ゴロリス……かな？
髪も、水色から白になっているし。

アキは……何も変わらずでブレザー制服だった。

髪の色は茶髪から銀髪に。結構似合っている。

マコは……制服。指定の物ではなく、真っ黒の学生服。

髪は黒から赤になっている。マコのイメージカラーは赤だな。

俺は……と、メニユーからステータスを開いて見てみる。

髪の色は紺から蒼に変わっていた。

服は……。

こ、これは……！！

黒の私服……だと……！！

神は俺を選んだ……！！

そんな事を思っていたら服をクイクイっと引つ張られた。

そっちを向くとユナが顔を伏せながら服を掴んでいる。

とっても可愛い、頭を撫でたい。

「……………」

そんな事を思っていたらジツと見られていた。

瞳も黒から水色になっている事に気づく。

「どうした？ユナ」

「……………無事で良かった」

「本当、二人とも無事で良かった」

ユナ言葉に続いて、アキも同じことを言う。

「こっちとしては、お前らが無事で良かったよ」

マコが心底、安心した様に続く。

その後、俺達四人は他愛もない話をした。

『皆の者、静まれ』

暫くして、男っぽい低い声が、広場に木霊する。

だが、誰も話すのを止めない。

むしろ、今の声でざわめきが増している。

『聞こえなかったのか？静まれ』

そんな言葉が聞こえてなおも、ざわめきは止まらない。

『はあ、今喋っている者に、^{ペナルティ}罰を与える』

その声と同時に、ざわめきが消えた。

おかしい、あれだけの声が一度に消える分けがない。

『まず、大切な事を言っておく』

その言葉が始まり。

『一つ。この世界からログアウトする事は……不可能である』

また、ざわめきが起きた。

『騒ぐな。罰を与えるぞ』

そう言っ、ざわめきは徐々に無くなる。

『二つ。この世界から出るには……この世界を攻略しろ。

それ以外に、この世界から出る事は不可能である』

攻略……ね。

まず、どんな世界なんだよ、ここ。

『この世界については、メニューのアイテム覧に、

パンフレットを入れておく』

後で確認しよう。

『あと、この世界のルールについても同様。

アイテム覧に入れておく』

『さて、何か質問のある者は拳手をしろ』

俺は……堂々と……手を……上げた。

『ほう。ではセナよ。質問を』

『聞きたい事は二つ。一つ、あんたは何者だ？』

『私か？私はお前達を連れてきた者の、主。

この世界の管理人でもある』

管理人……ゲームマスターみたいなものか。

『もう一つは何だ？』

『もう一つは……』

俺は一度、深呼吸をする。

もしも、この予想が当たっていれば、

もう一つの脱出方が出来るのだから。

「あんたは今、どっちの世界の、どこにいる？」

『ほう、面白い』

一拍置いて

『私は今……いや、これから、この世界に居る』

ユナが

「それがどうかしたの？」

と、小声で言ってきた。

俺は小声で

「重要なんだ」

とだけ、言っておく。

感ずかれてはいけないのだから。

そう言えば、ユナが普通に話しかけてきたのって、

これが初めてかもしれない。

「俺が聞きたいのはそこじゃない。あんたは今、

この世界のどこにいるのか。俺が知りたいのはそこだ」

その問いに、彼は暫く考え言う。

俺の考えていた通りに。

周りの人間には驚愕の事実を

『私は今、お前達と同じ場所に居る』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560z/>

ブースト・ブレード

2011年12月30日22時46分発行